

研究経過報告書

令和2年 10月 1日

研 究 員 (留学者)	所属 政経学部 職 教授 氏名 川島耕司
派 遣 期 間	令和2年 4月 1日 ~ 令和 2年 9月 30日
研 究 主 題 等	スリランカにおける仏教とナショナリズムの関連をアジア諸国との比較から考える
報 告 事 項	(研究活動の概要、内容、成果等、添付書類の見出し等)
	報告事項に関しては添付の別紙を参照ください。

報 告 事 項 (政経学部 川島耕司)

【研究活動の概要】

新型コロナウイルスにより、当初予定していた4月からのイギリスでの研究活動が困難になったため渡航は中止した。比較的近年において出版された書籍、インターネット等で公開されている雑誌論文、報告書等を用いて自宅にて研究活動を行った。

【研究内容および成果】

スリランカでは、多数派シンハラ人と少数派タミル人との間で続いた内戦が終結した後も、宗教的、民族的対立は収束していない。逆にキリスト教徒やイスラーム教徒に対する排除や暴力はより深刻になっている。これらの中心となっているのは仏教僧を含む過激な仏教徒勢力である。また同様の動きは現代のミャンマーにおいてもみられる。本研究・調査は、ともに上座部仏教を信仰する人口が大多数を占めるスリランカとミャンマーにおける仏教とナショナリズムの問題を比較し、その特質を探り、この問題の解決に関する手がかりを検討しようとするものである。

スリランカとミャンマーの仏教ナショナリズムには類似点が多い。民族の起源伝承と仏教との結びつき、植民地主義との関連、インドとの関係、反ムスリム感情の歴史的展開、仏教徒の商業的ネットワーク強化への欲求、仏教過激主義の政治的利用、特定のマイノリティを移民、外国人とみなす傾向などの点で両者は非常に類似している。ミャンマーでは本来の市民であることは仏教徒であり、かつビルマ族であるという感覚が非常に強く、非ビルマ族、非仏教徒の「他者」は国家への脅威であり、地域的あるいはグローバルな権力の利害の道具であるという主張が強い影響力を持っている。同様に、スリランカにおいてもシンハラ人はもともとの居住者で、マイノリティは移民、あるいは外国人として描かれることが多い。

また、仏教徒コミュニティが絶対的な多数派であるにもかかわらず「消滅」あるいは「入れ替わり」に対する深い恐怖が存在することでも共通している。ミャンマーにおいては、ラカイン州はベンガル・ムスリムに対峙する「西門」であり、ラカインが守れなければ、全ミャンマー、そして東南アジアがイスラーム化されていたという強固な信念がある。そしてそれがラカイン州に主に居住するロヒンギャ族への迫害の一因となっている。スリランカにおいても仏教やシンハラ民族の「消滅」への恐怖はきわめて強い。そしてそうした恐怖は、グローバル化によって国内の弱小マイノリティが国外の勢力とのつながりを深めるなかでさらに増幅されている。シンハラ人仏教徒たちはスリランカのムスリムたちはよりグローバルな諸力につながっていると感じ、ますます強く「入れ替わり」の恐怖を抱く。こうして強化された被包囲心理 (siege mentality) が外国的なものとされるマイノリティ諸集団に対するパラノイア的反応を引き起こしている。圧倒的な多数派でありながらも、エスニックな権力関係が逆転するという根深い恐怖が存在するのである。ただ、いかに根拠のないものだとしても、こうしたマジョリティの反応が存在することは事実であり、真摯に向き合う必要があることも確かであろう。自らをマイノリティとみなすマジョリティの仏教徒たちが持っている感情により配慮すぎだというマイノリティからの意見も存在する。

近年における世界的な反イスラーム言説の広がりやイスラーム過激主義によるテロ活動等も両国の過激な仏教ナショナリストたちの活動への支持を高める原因となっている。2001年のタリバンのバーミヤンの仏像破壊はムスリムの残酷さ、暴力、非寛容の例として引用されるようになった。両国においてイスラームのテロリスト団体が活動を行うようになったことは仏教ナショナリストたちの主張をさらに強めることにつながった。ミャンマーではアラカン・ロヒンギャ救世軍が設立され、スリランカではナショナル・タウヒード・ジャマートという集団によって2019年のイースター・テロが引

き起こされた。こうしたなかで、ミャンマーとスリランカの仏教ナショナリストたちは交流を進め、イスラーム主義のテロの脅威という語りを強め、防衛的暴力という観念はより受容されやすくなっている。

ソーシャル・メディアを利用した動員は両国においてみられ、インターネットによる憎悪の拡散は深刻な問題となっている。ヘイトスピーチはフェイスブックなどにおいてきわめて容易に拡散するが、それはこうした問題への対処を迅速に行うことが難しいからでもある。たとえば燃える寺院やイスラーム過激主義者のテロの画像はそれ自身は攻撃的ではないが、文脈によっては強力な憎悪扇動の手段となり得る。シンハラ語やビルマ語でヘイトスピーチを監視する能力を十分にもった人材が不足していることも事態を悪化させる原因となっている。こうしたなか、情報通信技術と英語が駆使され、オンライン上のイスラモフォビアのグローバルなネットワークへの結びつきが強化され、ますます効果的な反ムスリム・プロパガンダが発信されるようになった。欧米のイスラモフォビア勢力もスリランカとビルマに大きな関心を寄せているとされる。ネットによる憎悪の扇動に関してはスリランカの方が先行していると言われるが、両国において深刻な問題であることは間違いない。それゆえ、過激な仏教徒集団への対抗のためには逆に相互理解のメッセージの拡散にソーシャル・メディアを利用することが重要であるとも考えられている。実際、ミャンマーでは「花のスピーチでヘイトスピーチを終わらせよう」という運動が、スリランカでは'Not in Our Name'というキャンペーンが行われた。

また、両国に共通する問題の一つとして、イスラーム、あるいはその他の宗教に対する一般の人々の不十分な理解をあげることができる。人種主義的なステレオタイプがインターネットにおいてきわめて容易に拡散される原因の一つは明らかに相互理解の欠如にある。他宗教に関する正確な理解の促進、教育におけるカリキュラムの設定などが求められている。困難な状況下にもありながらも宗教間対話を求める市民社会的な運動も両国において根強くなされている。ミャンマーにおいては、宗教的指導者たちの対話が行われ、在家信者もユースキャンプ、礼拝施設や家庭を訪問すること、共同開発事業、宗教的祭礼を祝うことなどにおいて相互理解を深めようとしている。スリランカでは Sarvodaya Shanthi Sena が異なる宗教の説話を集めた子供向けの本を配布したり、エスニック研究国際センター (ICES) が宗教的共生に関する映画やアニメーションを作成したりしている。こうした動きが今後どのように展開するかという点についても注目すべきであると思われる。大半の仏教僧はほとんど世俗的な教育を受けておらず、現代の社会的政治的現実を不適切な形でしか理解していないとも指摘されており、仏教僧の教育を見直すことも必要であると考えられている。まず仏教僧を変え、その後に一般民衆を変える必要があると主張する高位の仏教僧も存在する。宗教的、あるいはエスニックなアイデンティティに関わる紛争の解決は非常に困難ではあるが、手に負えないものではないと考え、この課題に挑戦しようとする草の根の動きも多く存在するのであり、それらに注目することは重要であると思われる。

さらに、仏教ナショナリズムの社会活動という側面に注意を向けることも重要であると思われる。ミャンマーにおいては貧困者、老人、病人への奉仕活動、あるいは女性の権利、特に女性への虐待や一夫多妻制の禁止を求める運動などが行われている。ミャンマーでは従来仏教寺院が貧困者、病人、老人に食べ物や医療を提供してきた。しかし寺

院は財政事情などでそうした役割を果たせなくなっている。そのため、多くの仏教僧が仏教ナショナリズム団体であるマバタの旗印の下で社会活動を行っていることが報告されている。つまりこうした団体は社会的セイフティネットを提供しているのである。弱者救済やフェミニズム運動がスリランカにおいて仏教ナショナリズムの枠組みのなかでいかなる形で行われているかは興味深いテーマになりうると思われた。スリランカの場合も、少子化と世俗教育への需要の高まりにより仏教僧の育成が困難になっていることが仏教存続への不安の一要因になっているとも指摘されている。実際、スリランカには現在 12000 以上の寺があるが、2000 以上が閉鎖されたといわれる。存続しているとしても農村の小さな寺には一人の僧のみしかおらず、多くの場合その僧も非常に若く、村の指導を行うのはとても難しいという状態にある。さまざまな社会的、経済的変化の中で寺院が従来の機能を十分に果たせなくなっていること、しかも弱者に対する世俗的な施策がきわめて不十分であることが今日の仏教ナショナリズムの影響力拡大の一因であるとも考えられる。

両国に共通する問題として、不殺生を重要な教義とする仏教、特に両国の仏教の主流である上座部仏教がどのように暴力を容認するのかという問題がある。仏教ナショナリズムと暴力の問題を検討する上で重要な論点であると考え、この点に関する研究活動も行った。キリスト教やイスラームを含むほとんどの宗教の教義において暴力は否定されているが、同時にさまざまな仕方で暴力が容認され、あるいは宗教の名の下に暴力が行使されてきた。これらの宗教に比べ、仏教は合理的で倫理的、あるいは平和主義的な宗教であると見なされがちであった。しかし現実には仏教においても暴力が容認され、現代においてはスリランカやミャンマーにおいて特に深刻な問題となっているのである。

仏教と暴力の関係は大乗仏教と上座部仏教ではかなりの違いがある。大乗仏教においては慈悲という教えが重視され、一部には慈悲による殺人を肯定する教義もあった。もちろんこれは多くの宗派等によって否定されているのであるが、一部の経典が大乗仏教の道徳観の形成に、独善的でネガティブな影響を与えることになったとも指摘されている。一方で上座部仏教を信仰するスリランカにおいては、戦争における殺生が悪業となることを恐れる傾向が将兵の中に存在すること、暴力を公然と唱道することに対する自制があるとされる。しかし、上座部仏教にも護法という論理によって暴力がある意味消極的に容認されてきた歴史があることも事実である。ミャンマーにおいては、戦争によってブッダの教えを護ることは、功德を積むことのみならず、極楽やニルヴァーナに向かう道ともなるとしてむしろ積極的に暴力を肯定する論理が存在するともいわれる。ただ、仏教僧の組織であるサンガの中にも不殺生の教義の解釈に関してはさまざまな声、視点、緊張関係があるとされ、さらなる研究が必要であるように思われる。

スリランカとミャンマーにおける宗教、政治、仏教ナショナリズムなどに関しては過去数年間に多数の文献が公開された。今回の学外派遣においては、主にそれらの文献の検討を行うなかでさまざまな新しい知見を得ることができた。特に、マジョリティのもつ恐怖、相互理解への動き、仏教のもつ社会経済的役割などへのさらなる注目は必要であるように思われた。今回の学外派遣における研究成果を今後の教育、研究に活かしていきたい。

【在外研究において主に参照した文献】

- Ananda Abeysekara, *Colors of the Robe: Religion, Identity, and Difference* (Columbia: University of South Carolina Press, 2002)
- Ameer Ali, 'Four Waves of Muslim-Phobia in Sri Lanka: c.1880-2009', *Journal of Muslim Minority Affairs*, 35(4), 2015, pp.486-502.
- Brown, David, 'The ethnic majority: Benign or malign', *Nations and Nationalism*, 14(4), 2008, pp.768-788.
- Tessa J. Bartholomeusz, *In Defense of Dharma: Just-war Ideology in Buddhist Sri Lanka* (New York: RoutledgeCurzon, 2002).
- K. N. O. Dharmadasa. *Language, Religion, and Ethnic Assertiveness: The Growth of Sinhalese Nationalism in Sri Lanka* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1992).
- DeVotta, Neil (2007), *Sinhalese Buddhist Nationalist Ideology: Implications for Politics and Conflict Resolution in Sri Lanka*. Washington, D.C.: East-West Center Washington.
- Egreteau, Renaud, 'Burmese Indians in contemporary Burma: heritage, influence, and perceptions since 1988', *Asian Ethnicity*, 12(1), pp.33-54.
- Foxeus, Niklas, 'The Buddha was a devoted nationalist: Buddhist nationalism, resentment, and defending Buddhism in Myanmar', *Religion*, 49(4), October 2019, pp.661-690
- John Clifford Holt (ed.), *Buddhist Extremists and Muslim Minorities: Religious Conflict in Contemporary Sri Lanka* (New York: Oxford University Press, 2016).
- Imtiyaz, A.R.M., 'Eastern Muslims of Sri Lanka: Special problems and solution', *Journal of Asian and African Studies*, 44(1), 2009, pp.404-427.
- International Crisis Group, 'Buddhism and State Power in Myanmar', *Asia Report*, 290, 2017.
- Jones, Robin Noel Badone, 'Sinhala Buddhist Nationalism and Islamophobia in Contemporary Sri Lanka' (Honors Theses, Bates College, 2015).
- Stephen Jenkins, 'On the Auspiciousness of Compassionate Violence', *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 33(1-2), 2010.
- Michael Jerryson & Mark Juergensmeyer (eds.), *Buddhist Warfare* (Oxford, NY: Oxford University Press, 2010).
- Mark Juergensmeyer, Margo Kitts and Michael Jerryson (eds.), *The Oxford Handbook of Religion and Violence* (Oxford: Oxford University Press, 2013).
- Keyes, Charles. 'Theravada Buddhism and Buddhist Nationalism: Sri Lanka, Myanmar, Cambodia, and Thailand', *Review of Faith and International Affairs*, 14(4), 2016, pp.42-52.
- Peter Lehr, *Militant Buddhism: The Rise of Religious Violence in Sri Lanka, Myanmar and Thailand* (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2019).

- Chas Morrison, 'Buddhist extremism, anti-Muslim violence and civil war legacies in Sri Lanka', *Asian Ethnicity*, 21(1), 2020, pp.137-159.
- Camilla Orjuela, 'Countering Buddhist radicalisation: emerging peace movements in Myanmar and Sri Lanka', *Third World Quarterly*, 41(1), 2019, pp.133-150.
- Benjamin Schonthal and Matthew J. Walton, 'The (New) Buddhist Nationalisms? Symmetries and Specificities in Sri Lanka and Myanmar', *Contemporary Buddhism*, 17(1), 2016, pp.81-115.
- Narada Thera, *Buddhism in a Nutshell* (Onalaska, WA: BPS Pariyatti, 2017, 1st published Kandy: Buddhist Publication Society, 1982)
- Vladimir Tikhonov, Torkel Brekke (eds.), *Buddhism and Violence: Militarism and Buddhism in Modern Asia* (New York: Routledge, 2015).
- La Toya Waha, *Religion and State-Formation in Transitional Societies: Sri Lanka in a Comparative Perspective* (Baden Baden, Germany: Nomos, 2018).
- Matthew J. Walton and Susan Hayward, 'Contesting Buddhist Narratives: Democratization, Nationalism, and Communal Violence in Myanmar', *Policy Studies*, No.71 (Honolulu: East-West Center, 2014)
- Min Zin, 'Anti-Muslim Violence in Burma: Why Now?', *Social Research: An International Quarterly*, 82(2), Summer 2015, pp.375-397.

- 石川明人『キリスト教と戦争——「愛と平和」を説きつつ戦う論理』中央公論社、2016年。
- 榎本文雄『不殺生（アヒンサー）の動機・理由——インド仏教文献を主資料として』RINDAS ワーキングペーパー伝統思想シリーズ 14、3 頁、<https://rindas.ryukoku.ac.jp/research/upfile/伝統思想シリーズ%E3%80%8014.pdf>
- 岡野 潔「釈尊が前世で犯した殺人——大乘方便経によるその解釈」『哲学年報』 69, 2010-03 年、139-175 頁。
- 大谷栄一『日蓮主義とはなんだったのか——近代日本の思想水脈』講談社、2019年。
- 杉本良男「比較による真理の追求——マックス・ミュラーとマダム・ブラヴァツキー」『国立民族学博物館調査報告』90号、2010年。
- 仲島陽一「仏教の『慈悲』と共感について」『国際地域学研究』2号、1999年、101-111頁。
- 辻村優英「ダライ・ラマ 14 世における『最大多数の最大幸福』について」『宗教と倫理』15号、2015年、51-64頁。
- 渡辺章悟「大乘経典における慈悲と憐愍」『国際哲学研究』4号、2015年、89-94頁。
- 平木光二「ウィラトゥ比丘と仏教団体『民族・宗教を保護する会』（マバタ：MaBaTha）の反イスラームキャンペーンについて」『パーリ学仏教文化学』30号、2016年、65-86頁。
- 藏本龍介「ミャンマーにおける宗教対立の行方——上座仏教僧の活動に注目して」『現代宗教』国際宗教研究所、2016年、99-117頁。
- R. ゴンブリッチ『インド・スリランカ上座仏教史——テーラワーダの社会』森 祖道、山川 一成 訳、春秋社、2005年。